

運動に主体的に関わる子どもを育てる体育科学習指導 —動きを比較検討する活動の工夫を通して—

Health and physical education learning instruction to raise the child
who it is independent, and is concerned with exercise
— Through a laborer of the activity to weigh movement —

杉本 敏 則

Toshinori SUGIMOTO

(福岡教育大学附属久留米小学校)

(平成25年9月30日受理)

要 約

長い間、子どもの体力の低下が繰り返し指摘されている。さらに、この問題に沿うように二極化の傾向も懸念されてきている。このような中で、新学習指導要領の改訂が行われ、「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎の育成」、「健康の保持増進」「体力の向上」が目標として掲げられることとなった。この目標を達成するためには、子どもたちに自ら進んで運動の楽しさを追求させていかなければならない。そのためには、子どもたちが各種の運動における動きを獲得し、運動の楽しさを感じることができるようになることを大切に考え、それを、高めていくための手段としての動きを比較検討する工夫を実践を通して研究していくものである。

キーワード：運動, 主体的, 動き, 比較検討

I. 主題設定の理由

1. 社会の要請から

新学習指導要領においては、児童に生きる力をはぐくむことをめざしている。「生きる力」を育てるためには、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養っていかなければならない。小学校の体育科の目標も、「生涯にわたって、運動に親しむ資質や能力の基礎の育成」「健康の保持増進」「体力の向上」が示されており、「基礎的な身体能力を身に付け、実生活において運動を豊かに実践していくための資質や能力の基礎を培う」ことが改訂の趣旨のなかで示され、学習内容の確実な習得が求められている。また、平成20年から実施された全国体力調査では、図1に示すように運動をする子どもとしない子どもの運動時間において二極化が起きていることが、一週間の総運動時間の調査から明らかにされた。さらに、一週間の総運動時間が60分に満たない子どもはかなりの数に上るが、この子どもたちの運動時間について更なる分析がおこなわれた。図2では、一週間の総運動時間が60分未満の群の中で、体育の授業以外には全く運動やスポーツをしていない子どもが、男女とも25%弱という高い比率で存在していることが明らかになった。これらのことから、学校の体

育の学習以外にはほとんど運動をしていない子どもたちに、運動やスポーツに関心を持ち、関わっていく時間を増やさせるようにするには、どのように体育の学習を通して働きかけていくかが大切である。その働きかけが子どもたちの健やかな成長を促し、将来運動やスポーツを日常的に実施し、健康や体力の維持・増進につながることから、運動に主体的に関わる子どもを育てることは意義深いと考える。

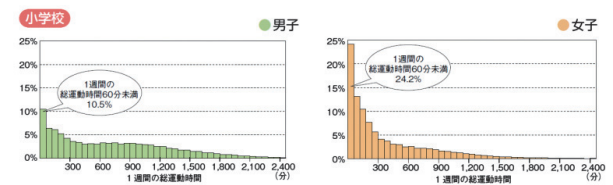


図1 二極化の傾向

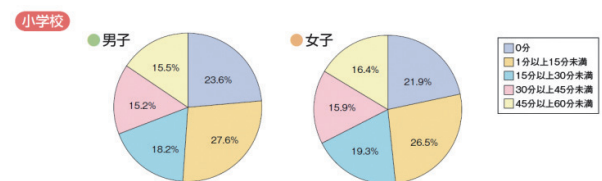


図2 60分未満の子どもたちの運動時間の分析

2. 本校体育部の研究の歩みから

本校の体育部では、『運動に主体的に関わるための言語活動』を主題とし、静的な言語活動、動的な言語活動といった二つの言語活動をもとに、友達と関わり合いながら一単位時間の学習に主体的に取り組み、子どもを育ててきた。その研究の中で、次のような成果と課題が明らかになった。

- それぞれの運動種目に応じて、効果的な言語活動の進め方やそのためにどのような手立てが必要であるかということが明らかになった。
 - 一人一人では、運動の楽しさや動き方のコツを見つけることは難しいが、仲間とともに活動する中で、動き方を理解したり、動きを高めたりすることができることが分かった。
 - ゲーム分析の記録をもとに、話し合う中で、自分からどのように動けばよいかなどを尋ねたり、話したりするなど、主体的に取り組んでいけない子がいる。
 - 子どもが自分にとって必要な動きはどのようなものか、自分の動きの達成度はどの程度であるかなど、適切な課題把握や現状把握ができるような学習活動が必要である。
 - お互いの動きを評価したり適切に評価できたり、お互いの頑張りを認め合うことができるような学習の活動の展開を考えていかなければならない。
- これらのことから、体育の学習の中で、仲間と円滑な人間関係をつくり、お互いに支え合いながら動きを見合ったり、動きのコツを教え合ったりするような活動を通して、一人一人が運動することの楽しさに触れながら学習していく必要があると考える。

II. 主題の意味

1. 主題の意味

(1) 運動について

運動とは、競争、達成、克服、表現といった目的をもち、それを実現するために設定した目標に向けて「動き」と「場」を操作していくことである。

つまり、運動は①「動き」②「場」③「目的」といった3つの要素からなると考える。

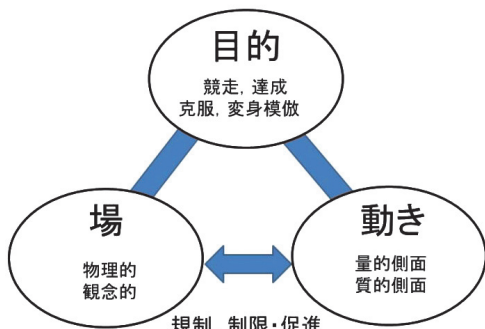


図3 運動

1) 「動き」について

個人によるものか集団によるものかによる違いはあるが、空間、時間、強度といった観点から捉え、高さや距離、回数などの「量的側面」と、リズムやタイミングなどの「質的側面」に分けられる。

空間	形態（量）方向（量）高さ（量）距離（量）
時間	速さ（量）リズム（質）タイミング（質）
強度	回数（量）強さ（質）

2) 「場」について

運動の場がもつ条件には、大きさや形などがある。ここでは、そのような物理的な場に加え、ルールやマナー、作戦なども場が持つ条件として加える。さらに、大きさや形、高さ、位置、数などにより違いが生じる器械・器具等も場を含める。

物理的	広さ、形、区域、器械・器具の大きさ、高さ、位置、数
観念的	ルール 作戦 マナー 約束
人的	役割 能力差 かかわり

3) 「目的」について

子どもたちは運動欲求に基づいて運動に挑戦していく、その欲求を4つに分類し、運動の目的と考える。1つ目は「競争」である。相手や相手のチームに勝ちたい、より多くの得点をとりたい、失点を減らしたいなどの目的意識がこれにあたる。2つ目は「達成」である。できる技を増やす、できる技をより美しくする、ダイナミックにする、安定させるなどの課題意識がこれにあたる。3つ目は「克服」である。できなかった技をできるようにするなどの目的意識がこれにあたる。4つ目は「模倣・変身」である。同じように動きたい、まねしてみたい、なりきって動きたいなどの目的意識がこれにあたる。

したがって、「目的」「動き」「場」の関係については図1のように考える。運動の主体者は、その個人がもつ「目的」により「場」のつくりかえや「動き」の変化を行う。一方で、「場」により「動き」が規制・制限されたり、促進されたりする。また、「動き」の高まりや「場」のつくりかえに伴って、「目的」に変化が見られることも考えられる。つまり、「目的」「動き」「場」は、相互に関連しあった関係をもつ。

(2) 運動に主体的に関わるについて

運動に主体的に関わるとは、子どもたちが運動するための目的を持ち、目的に応じて動きや場を自分で判断して変化させながら運動に取り組み、その運動の持つ楽しさに触れることである。

運動に主体的に関わることは、1時間の学習だけで終わることではなく、主体的に関わることを繰り返しながら、基礎的な身体能力や知識を身に付け、生涯に

わたって運動に親しむことができるようにしていくことをねらいとしている。つまり、体育の学習を通して運動が有する楽しさを味わったり、「できた」という思いを感じたりすることで、「また次の学習でも頑張ろう」「もっと上手になりたい」といった思いをもって学習に取り組むこととなる。その結果、運動に主体的に関わっていくこととなる。そうして、主体的な関わりによって本当におもしろかった、挑戦が成就したなどという充実感や達成感の体験を得ることができたときに、体育における主体的な学習がよりよいものへと高められていくと考える。

(3) めざす子どもの姿

- 進んで運動に取り組み、友達と協力して練習やゲームを繰り返し楽しむことができる子ども
- お互いの動きを見合って評価し合ったり、自分の動きを分析して課題を把握したり、動き方のこつを理解して練習の方法や作戦を考えたりすることができる子ども
- それぞれの運動に応じた動き方を理解し、目的に合わせて体を動かすことができる子ども

2. 副主題の意味

(1) 動きについて

動きとは、子どもが目的をもって運動に取り組む中で、場に応じて、体を操作する様子のことである。

体を動かす様子はすべて「動き」として捉えることができるが、機械的に体を動かすことも含まれている。つまり、体育の学習において、走るということも、集合の為に移動するのであれば、そこには場に応じたものはなく「動き」として捉えない。しかし、跳び箱運動の助走は跳び越すという目的のもと、踏み切りまでの間をどう走るのかが大切になることから、「動き」として捉える。

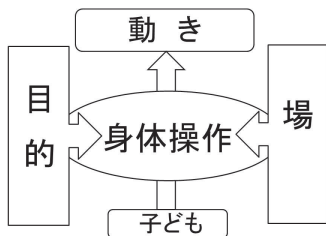


図4 動き

(2) 動きを比較検討する活動について

動きを比較検討する活動とは、学習のねらいとなる動き方に近づけることができるようにモデルとな

る動きや動き方のポイント資料と自分や友だちの動きを見比べ、動き方を高めるための改善を話し合うことである。

比較とは何かと何かを比べて、その共通点や差異点を見つけやすくすることである。つまり、どこが違うのかが可視化できることである。

1) 課題把握のための検討活動

前時との動きの比較や本時で捉えさせたい動きの比較など、実際に子どもたちが動く様子を比較する方法と映像での比較する方法で行うことができる。

2) 動きづくりのための検討活動

動きづくりを行っていく際に、自分の動きのイメージを可視化できるようにし、そのイメージと実際の動きを比較することから、動き方の決定や工夫を行うことができる。

3) 高まりを実感する検討活動

導入での動きや前時での動きと本時学習を行っていった後の動きとを、映像をもとに比較させて、自分の動き方の高まりを実感することができる。

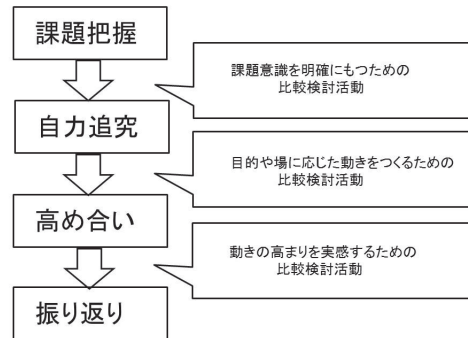


図5 検討活動

Ⅲ. 具体的構想

1. 体育科の特質に応じた単元構成の工夫

(1) 単元構成について

体育において、できるようになるためには、動きをつくる時間を設定することが大切である。ここで身に付けた動きを使って、運動を楽しみながら質的、量的

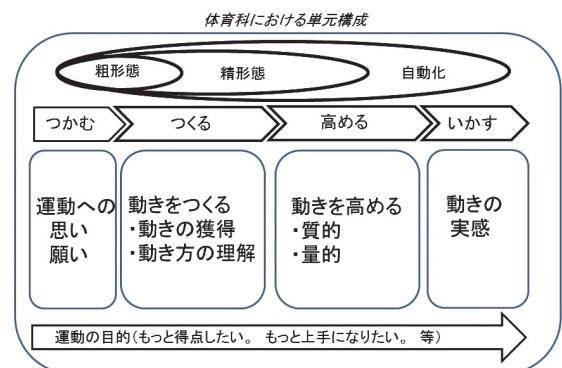


図6 単元構成

に動きを高めていく。そこで、動きを習得していく段階と身に付けた動きをもとに運動を楽しむ段階を位置付けた単元構成を行う。

(2) 学習過程について

学習過程においては、3つの比較検討活動をつかむ段階、つくる段階、高める段階に位置付ける。

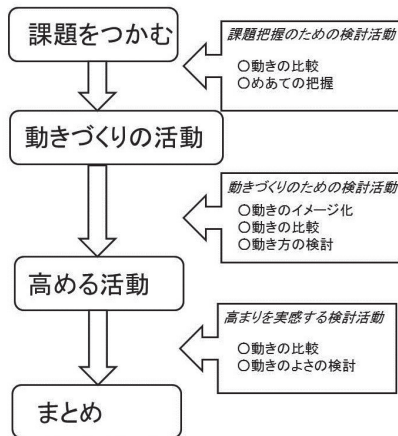


図7 学習過程

3. 教師の支援の具体化

(1) 動き方の理解について

自己評価、他者評価において評価する観点を明確にしてしておくことや図や言葉を用いて動き方の参考となる資料を提示しておくことが大切である。動き方のポイント図などは、教師が提示したものに加えて、子どもたちが実際に動きながら見つけたものも財産として書き加えていく。

(2) グループ編成について

どの運動においても、個人での評価活動だけでなく、他者からの評価を得ることにより、適切な情報を入手し主体的に運動に関わることをねらいとしている。そこで、グループによる活動が必要となることから、発達段階や運動の特性、個々の運動能力や人間関係などを考慮しながら、円滑な活動ができるようにグループ編成を考慮していく必要がある。

IV. 研究の実際と子どもの姿

1. 本単元の見どころ

- いろいろな速さや曲調の異なるサンバのリズムに関心を持ち、リズムの変化をつけたり、動きを組み合わせたりしながら意欲的にリズムにのって身体を動かすことを楽しみ、きまりを守って友達と仲よく運動する中で、関わりながらお互いの動きを高めようとする態度を育てる。
- リズムやテンポの違いをとらえ、体の各部位でリズムをとったり、体幹部を中心にリズムにのったりし、速さ、形態、方向、回数、タイミングといった観点から動きを見直して、作り変えたり、友達のよ

い動きを見つけてまねしたりしてよい動きを判断することができるようにする。

- リズムの特徴やテンポの違いをとらえ、リズムにのって全身で即興的に踊ったり、体幹部を中心にリズムにのって全身で踊りながら、体の各部位の動きと組み合わせたり、動く止まるなどのリズムの変化をつけたりし、友達と自由にかかわり合いながら楽しく踊ることができるようになる。

2. 本単元の計画

第3学年 単元「サンバでダンス」(6時間)

- | | | |
|---|------------------|---|
| 1 | サンバの楽しさを味わう | 1 |
| 2 | サンバのリズムに合わせて踊る | 2 |
| 3 | 仲間と関わり合って踊る | 2 |
| | (1) 動きを工夫して①本時 | |
| | (2) リズムの変化を工夫して① | |
| 4 | ダンス発表会を行う | 1 |

3. 本実践のねらい

動きが分かることで子どもたちのできる喜びや楽しさが高まり、次の学習での意欲につながる。そのために、比較することを効果的に用いた学習における手立ての有効性を明らかにしていくことである。

4. 本単元の教材について

本単元「ロックやサンバのリズムでおどろう」では、音楽やリズムが踊る誘発材料となり、リズムへののりが特性となる運動である。このようにリズムダンスは音楽との関係が深く、授業のどの場面で、どんな音楽をどのように使うかといった選曲が大変重要である。選曲に際し、ロックやサンバをリズムの特徴と学習のねらいに合った曲で、子どもの関心や力に合った曲を選んでいく。特にはじめの段階では、軽快なロックの曲で、やや速めの弾んで踊れる曲(BPM140前後)を用いる。また、体の中心でリズムにのることをつかませるために、各時間、導入の段階で、それぞれのリズムの特徴がはっきりしている音楽を使って、体を動かすことやみんなの手を取り輪になって楽しく体をほぐしたり、準備運動を行ったりする。単元の途中では、同じリズムでもテンポの違う曲をもとに踊らせ、ペアで動きを工夫しながら、即興的に自分たちのダンスを考えて踊らせる。単元の最後では、これまで使った、曲の中から選択させ、新しいペアでダンスを考えさせ、みんながダンスパーティーを楽しませる。このように曲のリズムとテンポの違いから、特徴を捉えさせリズムにのって踊ることに、楽しく慣れさせていくことから考えて価値のある教材と考える。

単元における音楽(曲)使い方

	時間	音楽とテンポ
つかむ	1	いろいろな曲で試しの踊りをする。 ロック…BPM140~130 サンバ…BPM140~130
つくる	2	サンバのリズムの特徴をつかんで、基本の動きで踊る。 サンバ…BPM140~120
	3	サンバのリズムの特徴をつかんで、基本の動きで踊る。 サンバ…BPM140 BPM130 BPM120
高める	4	イメージに合わせて動きを工夫しながら踊る。 サンバ…BPM140~120
	5	イメージに合わせて動きを工夫しながら踊る。 サンバ…BPM140 BPM130 BPM120
いかす	6	サンバのリズムでダンスパーティー サンバ…BPM140 BPM130

5. 本時の学習過程

時	学 習 活 動
つかむ	<p>1 映像をもとに前時活動を想起し、1人と2人での踊りを比較することにより本時学習におけるめあてをとらえる。</p> <p>・ビデオではリズムには乗ってきたけど、楽しそうでない。</p> <p>↓</p> <p>一人で踊る ・リズムにはのれる。 ・はずかしい</p> <p>↔</p> <p>友達と向かい合って ・楽しい ・たくさん動ける</p> <p>友だちといっしょにサンバを楽しくおどろう。</p>
つくる	<p>2 兄弟ペアでお互いの動きを見合いながら、友だちと一緒にサンバを楽しく踊る工夫を考えて、動きをつくる。</p> <p>○兄弟ペアで交代で踊りながら、お互いの動きを見合い、音楽に合った踊りを考えて踊る。</p> <p>太郎や苗のリズムが速く繰り返されているところだから、もっと細かくリズムに合わせて楽しく踊っているように見えるな。</p> <p>○イメージシートをもとにお互いのペアで気付いたことを話し合いながら、動きの改善点を確認する。</p> <p>二人で同じ動きをするのもいいけど、押したり引いたりしながら踊るのを見てると楽しくなるよ。</p> <p>○ミニ発表会を行い、それぞれのペアの踊りのよさをみんなで話し合う。(動きの情報収集)</p> <p>向かい合って 並んで 背中合わせ</p> <p>ずらす 合わせる かけ合う 手を取る</p>
高める	<p>3 テンポが違う曲を含む3つの曲から自分たちが選択した曲を使って、サンバの踊り方を工夫し、ダンス発表会を行う。</p> <p>○動きの情報をもとに選択した曲でサンバを踊る。</p> <p>向かい合ったり、せなが合わせになったり繰り返しながら踊ってみよう。</p> <p>○ダンス発表会を行い、お互いの動きのよさを見つける。</p> <p>踊っている時のみんなの顔が笑顔になって楽しそうに踊っているね。</p>
いかす	<p>4 本時学習をまとめ、自分や友だちの頑張りを振り返る。</p> <p>友だちと動きを合わせたり、ずらしたり、かけ合ったりするとより楽しくおどれる。</p> <p>・他の曲でも、踊ってみたい。</p>

6. 指導の実際と考察

1 / 6 時において

いろいろなテンポのサンバのリズムの特徴をとらえて、サンバのリズムにあった動きを考えて楽しく踊りたいという願いをもつ。

第1時では、サンバの曲を聴きながら、リズムの特徴について話し合い、「音に強い弱いがある」「弾むようだ」「体を揺らせそう」などの気付きを出し合った。いろいろなテンポのサンバの曲を即興で自分なりに踊ってみたが、十分には踊れていなかったし、恥ずかしがって踊ることができない子も見られた。それらのことから、もっと曲のリズムにあったダンスができるようになりたいという願いをもつことができた。

ただ、ダンスが踊れるようになるにはどうしたらいいのかと尋ねると、基本的な踊り型などを知りたいといった思いが子どもたちから出てきた。

第1時を終えての子どもの思い

サンバのリズムにあわせて楽しく踊りたい。



○踊り方を知りたい。

○分かるともっと楽しく踊れる。

第2, 3 / 6 時において

へそを前後や左右にスイングさせてリズムにのり、各部位の動きを組み合わせながら踊ることができるようにする。

第2時では、リズムにあわせた動きを教師から提示し、それをもとに子どもたちは動き方を考えていった。まずは、へそを中心に前後左右に振りながらリズムにのることを行っていった。最初は、へそを振ることができているかどうか、分からなかった子が多かったものの、少しずつ、腰に付けたポンポンの揺れをもとに、「もう少し速く」など、お互いにアドバイスをし合う姿が見られた。ここで、動きづくりのための検討活動を行っていった。お互いのグループでそれぞれの動きを見合いながら、自分の動きと友だちの動きを比較し、もっとポンポンがはね上がるように左右に腰を振りながら腕の動きを加えていくと楽しく踊れそうだという考えをもって活動を行った。また、動き方を組み合わせながら自分のダンスをつくっていった。導入でのダンスの様子と本時でのダンスの様子を比較するこ



写真1 検討活動

とにより、「少しかっこよく踊れるようになってきた」という思いを持ち、次の学習が楽しみという思いを持つことができた。

学習後 A 児は、最初はどうやって踊ればいいのか全然分からなかったけど、同じグループのみんなの踊り方を見ていると、動き方が分かってきたし、友だちから腕を振ることもアドバイスしてもらって今日は楽しく学習できたと感想を話した。

第2時における考察

第2時では、ほとんどの子どもがサンバのリズムに合った踊り方を知らなかった。そのことから、導入において、モデルとなるサンバのダンスと前時での自分たちのダンスの映像を比較して見ることで、動きの違いを明確に捉え、基本的な動き方を捉えるといった学習の課題を意識して取り組むことができた。

第4, 5 / 6時において

ペアの友達と動きを対応させたり、かけ合ったり、立ち位置を工夫したりして楽しく踊ることができるようになる。

第4時では、それぞれが工夫してきた動きをペアで行うともっと楽しくできることに気づき、そのための方法として、動き方を工夫していくことをねらった。

(1) つかむ段階の比較検討活動について

1) 目的

本時学習で身につけるべき動きを捉え、本時学習におけるめあてを設定することができる。

2) 内容

表情やへそを中心に体を前後左右に振るといった体の動かし方、音楽やリズムのとらえ方といった視点をもとに、一人でダンスをする様子と二人でダンスをする様子と比較させ、その結果をもとに友達と一緒にサンバのリズムに合わせて踊るといっためあてを捉えさせる。

3) 仮説

細目1 課題把握のための検討活動

「つかむ」段階で、前時で踊っている様子の映像を見て、リズムよく踊る視点や楽しく踊る視点を確認し、一人で踊っている様子とペアの友だちと踊っている様子と比較させ、二人で踊ると楽しく踊れるということに気付かせたことは、本時学習において友達と一緒にサンバを楽しく踊っていくというめあてをつかむ上で有効であったか。

4) 指導の実際

T1 前の時間では、どんな活動をしましたか。

C1 サンバのリズムの曲によって踊った。

T2 この映像は前時学習の様子です。

※前時の活動の映像を見せる。

サンバのリズムによって踊れるようになってきましたか。

C2 だいたいリズムによって踊れるようになってきたと思います。

T3 リズムにのっているかどうかは、どこを見れば分かりますか。

C3 腰に付けているポンポンがサンバの曲のリズムに合わせて動いているかどうかを見れば分かります。

T4 リズムにのってる人も増えてきたけど、楽しそうに踊っていますか。

C4 楽しく踊っている人もいるけど、踊っていない人もいます。

T5 ジャあ、どこを見れば楽しそうかどうか分かりますか。

C5 踊っている人の顔を見れば楽しそうかどうか分かると思います。

T6 一人で踊る様子とペアで踊る様子を比べてもらいます。まず、一人で踊る様子からです。それぞれ一人ずつ踊って下さい。では、次はペアで踊る様子です。どうでしたか。どちらがリズムによって楽しく踊れますか。

友だちと一しょにサンバを楽しくおどろう。



写真2 比較



写真3 試しのダンス

5) つかむ段階の比較検討活動の考察

友だちと一緒にサンバを楽しく踊るといっためあてを捉えることができていた子は、学級で半分程度であった。一人で踊っているときと二人で踊っているときの様子を比較させることで、二人の時が楽しいということに気づかせるつもりであったが、何をもとに楽しいかを判断させるのが明確でなく、それぞれの表情だけで捉えさせようとしたことが原因であったと考える。改善策として、一人でも踊れているがその表情から楽しそうでないことが分かるような映像、つまり、アップで表情がよく分かるような映像を準備して比較させることが必要であると考えた。

(2) つくる段階の比較検討活動について

1) 目的

曲のイメージを明確につかむためのイメージシートをもとに、ペアでイメージに合った動き方を考え、イ

イメージシートの動きと実際の動きとの比較から、使える動きや組み替えることができる動きを判断したりして、ペアでのダンスの動き方を見いだす。

2) 内容

サンバの動きの資料や友達の動きを観察して書いたイメージシートといった、動きに関する情報をもとにリズムに合う踊り方やその工夫を友だちと見合いながらお互いの動きを比較し、よりよい動き方を吟味する。

3) 仮説

細目2 動きづくりのための検討活動

「つくる」段階で、兄弟ペアでお互いの動きを見合う時に、イメージシートを活用して、音楽のどの部分でどのような動きを工夫するかを記したイメージシートとペアでの踊りを比較して、イメージシートをもとに話し合ったりしたことは、リズムにのって踊る上で有効であったか。

4) 指導の実際

T1 ペアの友だちと協力しながら、イメージシートに動き方を考えていきましょう。

C1 曲のリズムに合わせて、ぴったりな動きを考えていきたいね。

※曲を繰り返し聞きながら、イメージシートに動きをかき込んでいく。



写真4 動きの作り



写真5 イメージシート

T2 それでは、イメージシートの動きを試しながら、動きを確認して楽しくダンスできるようにしていきましょう。

C2 曲のイメージに合わせて踊れるようになってきたな。

T3 今から兄弟ペアでイメージシートの動きと実際の動きを比べながら、お互いの動きを見合っていきます。動きを「ずらす」「合わせる」「かけ合う」の3つの点から見合っていきましょう。

※お互いの動きを見合う。

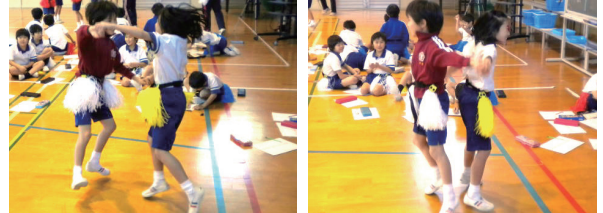
T4 では、動きのポイント資料やこれまでの学習から、お互いのペアの動き方について話し合いを行いました。



写真6 動きの検討

C4 ここでは曲が段々と速くなってきているから二人の動きを合わせて、腕と一緒に体をねじりながら踊るようにすると楽しく踊れるようになるんじゃないかな。

C5 速くなる場所の動きをもう一同考えて踊ってみよう。



5) つくる段階の比較検討活動の考察

動きを考えて、工夫していくことができるようにイメージシートに動きをかき込んでいき、その内容と実際の動きを兄弟ペアで見合っていた。どのようなイメージをもって動きを考えていったのが兄弟ペアの子も理解できた上で、動きを見ることができたので具体的に曲のどの部分をどのように変えた方がいいのかについて話し合うことができていた。頭の中で考えた動きをかきだし、視覚的に比較できるようにしたことは子どもたちが動きをつくりだしていく上で有効に働いたと考える。しかしながら、単に、かきだしたものと動きが合っているかを伝えるペアもあり、そこに曲の流れが関わっていることを共通理解しておく必要がある。

(3) 高める段階の比較検討活動について

1) 目的

本時学習において自分の動きがどのくらい高まったのかを確認して、動きの高まりを実感することができる。

2) 内容

導入でのサンバのリズムの曲で踊る様子の映像と高まる段階での踊る映像との比較から、自分たちの動き方のよさや工夫を話し合う。

3) 仮説

細目1 高まりを実感する検討活動

「高める」段階で、導入での踊り方の映像と高まる段階での映像を、「リズムにのっているか」「楽しそうに踊っているか」「ずらす、合わせる、かけ合う工夫があるか」という点から比較して、お互いの踊り方や工夫について話し合ったことは、お互いの高まりを実感する上で有効であったか。

4) 指導の実際

T1 リズムにのって、友だちと動きを工夫しながら、楽しく踊ることができましたか。

C1 友だちと一緒にだったから、楽しく踊ることができました。

T2 それぞれどのようなところが、変わったのかを見てみたいと思います。まず、今日の最初のダンスの様子を見てみましょう。

C2 うわあ、二人の動きがばらばらだよ。

C3 一人で踊っているときの方がリズムにのって踊っていたよ。

T3 次に、今日の最後のダンスの様子を見てみましょう。

C4 最初のダンスよりもとっても楽しそうに踊っているし、踊り方に工夫がたくさんあるね。

T4 最初と最後の様子から、自分たちの動きはどう変わりましたか。ペアの友だちと話し合ってみましょう。

C5 今日の学習で、どのように工夫したらいいかが分かったから、ダンスがかっこよくなったね。もっと速い曲でも、踊ることができそうだね。



写真7 ダンスを楽しむ

5) 高める段階の比較検討活動の考察

導入でのダンスと学習の終わりでのダンスを比較することで、自分たちの動き方がどのように変わっていったのかを捉えさせるために、映像を活用したことは有効であったと考える。ただ、同じリズムの曲でなかったことから、明確に比較することはできず、だいたい、なんとなくといった捉えに終わっていた。改善策として、見合う視点を与えていたが、表情は、腕の動きは、腰のふりはなど、もっと視点を焦点化して与えるべきであると考え。

IV. 全体考察

資料1は、ダンスという子どもたちにとって恥ずかしさを感じる単元での学習で、第1時と第6時での調

資料1 単元の最初と最後の後の調査

サンバでダンスのアンケート調査		
	最初	最後
1 ダンスは好きか。	50%	90%
2 みんなの前でもダンスができる。	38%	100%
3 ダンスに興味があるか。	18%	48%
4 自分から進んで学習できたか。	63%	93%
5 動きやイメージを見つけられたか。	45%	88%
6 教え合ったり、助け合ったりできたか。	60%	95%

資料2 子どもの感想

わたしはサンバのダンスで楽しく踊っておどけた。ずっと同じリズムで最後までおどらないうといけなかったのダンスしづかされたという時が一回あったけど、とってむたのしづかたです。

ペアの さんとすると、さい、はずぐはすかしかたけど、いい動きを取り入れ、楽しくはすかしからすにおどけたし、サンバはリズムのこつをつかむと楽しくできてよかった。

前までは(一人の時)あんまり、たのしくおどっていなからたけれど、このように今はダンスのペアができてたのしくおどれるようになってよかった。

査を行った結果である。ここからは、学習を行うにつれて、ダンスに興味を持つことが明らかになっている。そこには、進んで学習できたことや自分なりに動きやイメージを持てたことも大きく影響していると考えられることができる。そして、動き方が分かったり、友だちと協力し合ったりしながら学習を進めていくことが運動について興味を高めることとなると考える。また、学習後の子どもの感想から分かるように、リズムを捉えたり、動き方のこつがつかめたりしたことにより、最初は恥ずかしさを感じていたダンスを楽しむことができるようになってきている。また、仲間と協力したり、お互いに動きを見合うことを行ったりすることにより、動きを獲得していくことができていると考える。ただ、これから研究を進めていく上で、他領域でも主体的に関わる子どもの姿を検証していく必要がある。

引用・参考文献

- 1) 小学校学習指導要領解説 体育編
文部科学省 平成20年
- 2) 高橋建夫「体育授業を観察評価する」
明和出版 2006年
- 3) 杉原 隆「運動指導の心理学」
大修館書店 2003年